

# 進学塾とその機能

## —集団面接調査を手がかりとして—

深 谷 昌 志

### 1. 問題設定

学習塾については、すでに多くの調査がなされている。公立機関などから公表された主な報告書だけでも、十指を上回る(1)。その他に総理府(2), NHK(3), 銀行(4)などの実施した調査で、アイテムに塾通いを含めたものに範囲を拡大すれば、枚挙にいとまがない。

こうした調査の中で、もっとも大規模なものは、文部省の実施した「児童生徒の学校外学習活動に関する実態調査」であろう。これは、小・中学生の父母を対象にした第1次調査と、第1次調査からリスト・アップされた学習塾経営者をサンプルとする第2次調査から構成されている。しかし、この調査は利用しやすい形で速報が出されているので(5), 詳細は省略したい。

文部省調査の成果を、一言で要約すれば、塾通いする子が、全国平均で、小学生の20%に達することを明らかにした点にあろう。その他は、従来、断片的に、あるいは、経験的に言われてきた事実を、改めて、数量的に裏づけたものという印象を受ける。もちろん、小学生の場合、人口十万以上の都市の通塾率が23.4%, 10~3万: 19.7%, 3万~8千: 15.1%, 8千未満: 6.4%と、地域による格差が示されている。県別集計についても、小学生平均で、東京(23.0%)や高知(20.8%)のように、通塾率が2割一高学年に限定すると、ほぼ4割一を越える県もあれば、宮城(1.7%), 岩手(2.4%)のように、2~3%台一高学年で、3~5%一の地域も存在する。したがって、県や市町村レベルの調査で、通塾率の凹凸が認められるのは当然だが、その他の結果は、文部省調査と一致しているものが多い。

文部省も含めて、公共機関の調査は、その多くが実態調査と名づけられている通り、通塾率調べを基本とし、付隨的に、塾通いの回数、時間、教科、月謝などを尋ねている。そして、公表された報告書は、単純集計一あるいは、学年、地域、性などを

使った単純なクロス集計一の範囲に止まっているので、データを手がかりとして、学習塾についての考察を深めるのは困難である。特に、塾通いについての意識分析が、ほとんど行われていない。また、塾通いが、子どもの生活にどのような影響を与えるのかなどの分析も、未開拓の印象を受ける。

もっとも、こうした分析は、本来、研究者サイドが担うべきものであろう。しかし、塾通い現象が予想を上回る勢いでまん延したためか、研究者側からのアプローチは立ち遅れている。学習塾が大きな社会問題化している現状を考えると、これは、筆者も含めて、教育社会学研究者の問題意識の甘さを示したものと反省せざるを得ない。

文部省の調査に続いて、現在、多くの教育委員会で、学習塾の実態調査が行われている。したがって、この1~2年の内に、注記した以外にも、塾通いの統報が公表されよう。そこで、本稿では、データの量的な分析は別の機会にゆずり、質的なアプローチで、塾通いの問題を考察していくことにしたい。

NHKの世論調査所が、愛媛県下で、親、教師、子どもを対象に、学校観を分析した調査がある。その中で、同一の質問項目を使って、塾通いの原因を尋ねているが、第1位に挙げられた理由は、以下の通り<sup>(6)</sup>であった。

生徒=学校では、よく分かるまで教えてくれないから、42.7%（7項目中1項目選択）

父母=学校の授業では、子どもの能力を伸ばしてくれないから、22.7%

教師=（親たちの）よい高校へ入学させたいという気持ちが強いから、39.7%

教師は親の高望みを批判し、親は学校が期待に答えていないと非難する。そして、子どもは、学校の授業についていけないと訴える。それぞれに、もっともな理由ながら、互いに不信感をつのらせる間にも、塾通いがまん延していく。しかし、逆にいえば、親たちが高望みをやめ、学校が親たちの期待に添い、子どもたちが学校の授業に充足感を味わえるなら、塾通いは減少する計算になる。つまり、個々の学校レベルでとらえるなら、塾通いを、学校、親、子どもの三者間に生じた教育病理現象一主因はともあれ一ととらえるのが妥当であろう。

筆者は、ここ数年、学級を単位とした面接法で、子どもたちの行動を追跡してきた。テレビ欄や校区の地図などを利用しながら、個々の子どもの前日の行動半径を聞き取る調査である。1人当たりの面接時間は平均40分。この方法は、他の事例研究法と同じように、一般化への難点を含む反面、対象を掘り下げ得る利点を備えている。以下、こうしたファイルの中から、学習塾に焦点をあてて、いくつかの事例を紹介することにしたい。

## 2. 「乱塾」と「無塾」との距離

### (1) 5割以上が塾通いする事例一

市川市立M小5年X組。児童数36名、内、通塾児23名。通塾率64%。調査対象日、昭和51年2月19日。

まず、1人の子どもの行動記録を紹介したい。仮に、K夫と名づけておこう。

2時、帰宅後、クラス・メートが2人遊びに来て、サッカー・ゲームなどをする。

3時半～5時、Y進学教室の日曜テストの準備。国語の下調べをする。前回のテストで3千人中、7百番だったので、百番以内を目指している。

5時～6時半、弟と2人でプロレスごっこをしながら、「新オバケのQ太郎」などのテレビを見る。

6時半～7時半、学校の宿題をやる。その後、国語5年生下巻の漢字書取。

7時半～8時半、夕食後、入浴。

8時半～10時半、算数と理科を中心に、Y進学教室の下調べ。

K夫が、日曜日に通っているY進学教室は、Nと並んで、東京では定評のあるマンモス・テスト塾のひとつだ。ここでは、指定した参考書の中から、次週の出題範囲が示されている。したがって、子どもたちは、それぞれの仕方で予習を行い、日曜のテストへ臨む。しかし、出題範囲が学校の教材より、3～6か月、先行しており、しかも、水準が高いので、独力で自習しにくい。そのため、K夫は、Y進学教室の予習を目的として、火曜と金曜の午後5時半から8時まで、バスで15分ほど先にある市内I進学教室へ通っている。I進学教室は、Yとチェーン化されているわけではないが、YやNなどのテスト受験生を対象とした特別クラスが作られている。つまり、K夫は、自習—I進学教室（地元）—Y進学教室でのテストという3段階の構えで、勉強を進めている。当然、学校の勉強は、宿題をやる程度にとどまっている。

極端な事例と思われるがちだが、K夫と同じように、3段階の構えで勉強をしている子は、このクラスだけで、6人を数える。これらの子は、いずれも、東京の私立中学進学を目指している。

M小の校区は、市川市の西はずれにあり、江戸川をはさんで、東京都と隣接している。したがって、東京の有名私立へ電車で30～40分、いずれも通学可能の範囲にある。加えて、千葉県の名門校、千葉一高へ通うには、小1時間必要であり、しかも、千葉県が学校群の採用に踏みきった—昭和53年度より中止—ことが、親たちの東京指向へ拍車をかけた。

市川市は、昭和の初め、高級住宅地として発展してきた。古くからの住宅の多いA小学校では、6年生の6割が中学を受験している。M校の校区は、昭和30年代以降に開発された新興住宅地だが、それでも、受験生は4割を超える。昭和50年度の場合、東京のいわゆる一流中学合格者は全校で4名にすぎない。受験希望者が急増している

割に、入学者数は、この10年、ほぼ一定している。なお、K夫の成績は、クラスでは「上の下」。念のため、K夫の現況を補足するなら、残念ながら、K夫は、1年後の受験に失敗し、今は、地元の公立中学へ通っている。

調査対象日、36名のクラスの内、10名が塾通いをし、1人平均2時間半を費やしている。もちろん、クラスの64%が、週2回以上、塾通いをしているのであるから、この日が特異日なのではない。こうした日課が、毎日のように続く。なお、23名の通塾児の内、規模の大きな予習塾へ通う者が14名。残りの9名は、地元の小規模な補習塾へ通っている。また塾へ行っていない13名の内、「6年生になったら、塾へ行く」と答えた子が5名を数えた。したがって、調査日から2か月もすれば、このクラスの通塾率は、ほぼ8割に達していよう。

こうした描写を行うと、遊びを忘れた疲れきった子どもも像が浮かんでくる。そこで、クラス全員のこの日の行動を要約して示すと、図1の通りとなる。3時から5時にかけて、仲間と外遊びをしている子どもの姿が目につく。この日は、男子11名と女子5名が、放課後の校庭開放を利用して、フット・ベースやバスケットを行っていた。その他、5名の女子が集まって、トランプに興じている。こうした状況は、遊びを忘れがちな現代の子どもの中で、異例な長さに属する。また、テレビ視聴も、予想外に長く、1人平均2時間3分を費やしている。

遊びの充実ぶりは、地元の大手の学習塾が、午後6時から始まるのに関係している。多くの子どもは、けいこごとを止め、学習塾だけに学校外の教育をしぼっているので、放課後、通塾までの約3時間が空白になる。学習塾を「第2の学校」とよぶこ

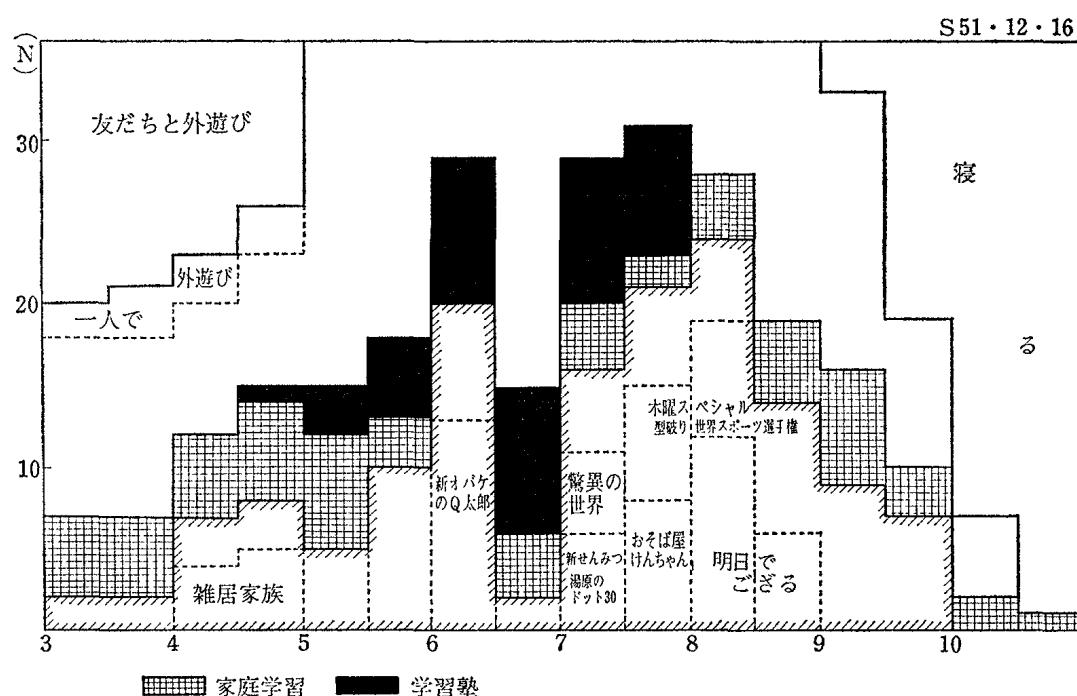


図1 M校の事例

## 進学塾とその機能

とがある。M校の場合、塾は、文字通り、第2の学校として機能している。子どもたちは、第1と第2の学校との谷間を、ロング・タイムの休み時間のように利用していた。いずれ夜になったら、塾通いや勉強をしなければならない。せめて、それまでの時間を能率良く遊ぼうというのである。

ここで、塾に対するM校の態度を補足しておこう。昭和45年、I進学教室のようなチェーン化された塾が、地元へ進出してきた。当初、学校側は、塾通いに干渉する方針で臨んだという。しかし、教師の発言は聞き流されがちの上、PTAとのトラブルが生じるので、現在では、無干渉の状況にある。受験するしないは、各家庭の判断に委ね、学校は、公立中学進学を前提として、基礎学力の充実を目指している。ただし、塾通いする子の便宜を考えて、下校時間は守るようにしているという。

M校の子どもたちの下校から就寝までの持時間は、平均7時間弱。その使い方は、平均して、勉強に1時間半、テレビが2時間、友だちとの遊び1時間、その他一夕食や入浴など2時間半の構成であった。

M校の事例は、塾通いを考えるさいの多くの手がかりを与えていた。他地域との比較はのちにゆずり、M校からの考察を要約すれば、以下の通りとなろう。

1 K夫のように東京のマンモス塾へ通う子、地元の塾のみの子、通塾予定の子というように、塾通いは層化されている。しかし、成績の良い子がつねに受験するわけではないから、学業成績と通塾の度合とは必ずしも相関を示していない。

2 通塾率が6割を越える地域でも、予想外に、子どもたちは、時間を有効に活用し、仲間との外遊びやテレビ視聴を行っていた。

3 K夫は、進学塾の進度に焦点をあてて、学習を進めている。そのため、学校の授業は学習のまとめ的な機能を果たしている。今後、K夫のような生活を送る子どもが増加するなら、塾が主要な学校で、学校が補習教育機関となる可能性が強い。

### (2) 塾通いのない事例—

岐阜県白川村S小学校5年。児童数28名。通塾児0名。調査対象日、昭和52年3月9日。

現在、かなりの山村を訪れても、校区の周辺に、塾の存在を見出すことが多い。例えば、筆者たちは昭和51年3月、三重県度会郡南島町のK小学校を訪れた。能野灘に面した一級へき地校だが、ここでも、校区の中に、そろばん塾などのけいこ所があり、バスで5分ほど手前の隣りの校区に、学習塾が進出していた。子どもたちは、まだ塾通いをしていなかったが、だからといって、仲間と外遊びをすることではなく、子どもたちは家に閉じ籠り、3時間以上、テレビを視聴していた。

K小の子どもたちの詳細は、別の機会にふれているので(7)、ここでは昭和52年3月に訪れた大家族制で知られる白川郷の事例を紹介したい。高山市から60キロ、バスで2時間ほどの距離にあたる。S小は、各学年15~30人前後の単級編成の学校であった。

さすがに、白川郷まで来ると、学習塾はむろんのこと、けいこ塾の姿もなかった。

ここでは、6年生の事例を紹介しよう。被調査日、卒業写真の撮影があって、子どもたちの帰宅は4時近くになった。しかし、就寝まで、6時間20分の自由時間が残されている。そこで、塾通いをしていない子どもたちが、この時間を、どう使うのかが関心をひく。

K子は3人きょうだいの末っ子。学校からひとりで帰宅し、おやつを食べながら、「太陽にほえろ」（再放映）を見る。

5時～6時、「気になる嫁さん」を見る。これは、いつも見ている番組である。

6時～7時、「巨人の星」を見ながら食事。いつもはテレビを消すが、最終回なので、例外的に認めてもらう。茶わんふきの手伝い。犬に夕食を与える。

7時～8時30分、日記、その後、テスト勉強。高山で買って来たシート教材を使って、算数の勉強をする。

8時30分～9時、「気まぐれ天使」の後半を見る。

9時～10時、兄と2人で、「ふたりでひとり」を見る。途中で入浴、10時、就寝。

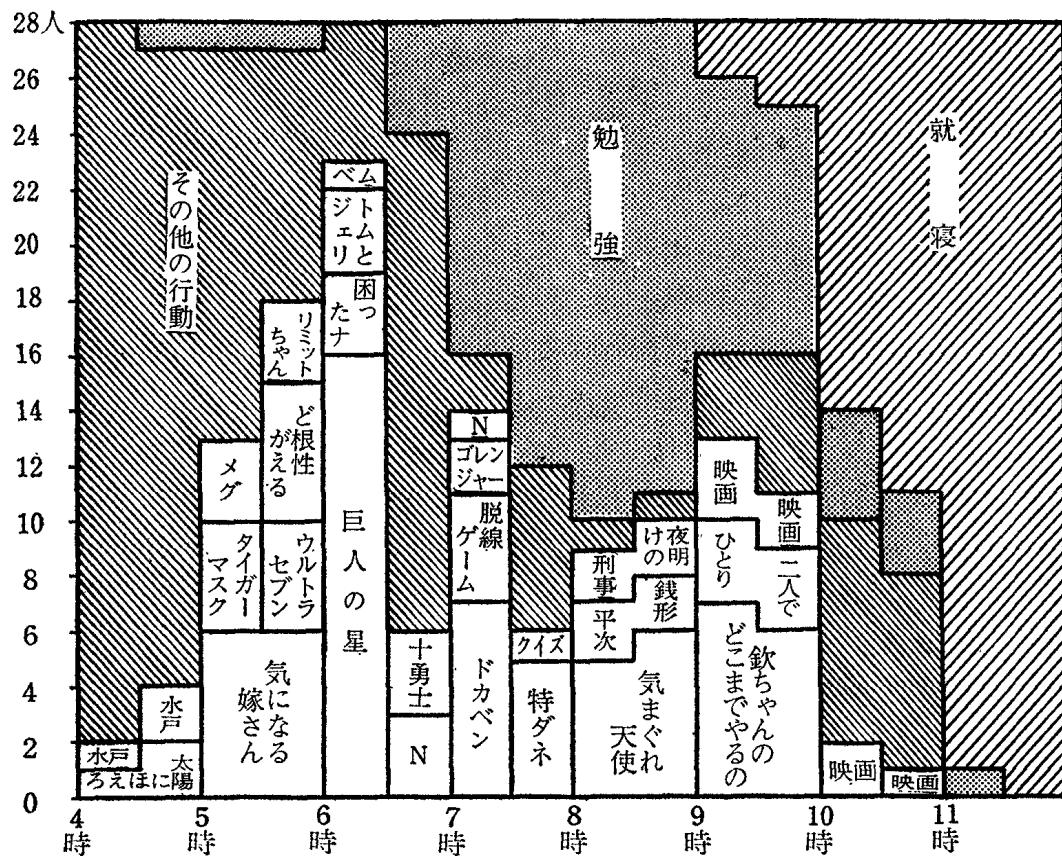
K子の1日は、単純である。1時間半の勉強、食事、入浴以外は、すべての時間が、テレビ視聴に費やされている。

先ほどのM小と同じように、クラスの子どもたち全員の行動記録を、図2に提示しておく。子どもの生活は、テレビ、1人遊び、勉強に三分できる。テレビ視聴は、1人平均1時間26分で、K子は視聴時間の長い方から3番目の子である。NHKの生活時間調査(1975年)では、ロー・ティーンのテレビ視聴時間を2時間5分と見込まれている。小学高学年生は、それよりもやや長く、視聴時間の平均は2時間15分程度であろう。こうした数値と比較して、S小の子どもたちの視聴時間は40～50分も短い。また、6年生28人の内、帰宅後、外出した者は4人にすぎない。しかも、1人は、父親に言われてポストへ手紙を出しに、他の1人は、母親に頼まれて夕食の豆腐を買いに、残りの2人は、「ほんこさま」(仏事)があって、両親と親類へ行ったが、外出理由である。少なくとも、この日に限れば、K子と同じように、どの子も、友だちとの交流はおろか、自分のための外出も皆無の生活を送っている。

かたつむりのように、巣に閉じ籠りがちの子どもの姿を見かけることが多い。しかし、S小の事例は、あまりに極端であった。もちろん、この日、前述した理由で、下校が遅れた。「巨人の星」の最終回が6時から放映されたなど、巣籠りを促進した要因も存在している。しかし、被調査日は、快晴で暖かかった。白川郷に50センチの積雪がふったのは、11月29日。近年まれな豪雪に見舞われ、それ以来、2～3メートルの雪が積もり続け、村道から、雪が消えたのは、3月に入ってからであった。待ちに待った春が来たのに、遊びたわむれるはずの子どもたちは、合掌作りの家の中で、夜までの2時間を過ごしている。

4時から6時までの時間の使い方は、不明の部分が多い。子どもたちの答えは、「ぼんやりしていた」、「おやつを食べた」、「マンガの雑誌をみた」……であった。く

## 進学塾とその機能



## 注

- 水戸…水戸黄門
- ベム…妖怪人間ベム
- 十勇士…真田十勇士
- N…ニュース
- 特ダネ…特ダネ登場
- メグ…魔女っ子メグちゃん
- リミットちゃん…ミラクル少女リミットちゃん
- ゴレンジャー…秘密戦隊ゴレンジヤー
- 脱線ゲーム…新底抜け脱線ゲーム
- クイズ…クイズ・グランプリ

図2 S 小 の 事 例

つるぎの時と言えばそれまでだが、空白の時が流れている。

S 小に限らず、子どもの余暇時間は、仲間遊びから孤独な気晴らしへと推移している。こうした変化は、子どもの人間形成に重要な意味を持つと考えられるが、小稿の主題からそれるので、問題の指摘にとどめ、先を急ごう。

テレビも見ず、仲間遊びをしない子どもたちは何をしていたのか。もう一度、図2に目をとめて欲しいが、S 小の子どもの勉強時間は長い。7時から10時にかけてが、勉強の時間帯となっており、1人平均1時間47分を費やしている。この日の宿題は、算数の「6年のまとめ」で、ほとんどが計算問題であるから、算数の苦手な子どもでも、40分もあれば、仕上がる。残りの1時間強を、子どもたちは、「テスト勉強」の

ために使っていた。「テスト勉強」とは聞きなれない名だが、テストのための勉強という意味らしい。もちろん、そのテストは、学校で行われる小テストのことだ。漢字のドリルは担任の作製したプリント集、算数は、「グリップ」や「バラ・シリーズ」を利用して、子どもたちは勉強していた。

白川郷は、合掌作りで全国的に有名だが、民宿が繁盛するのは、夏場の2か月にすぎない。筆者たちの訪れた3月も、よそ者はわれわれだけで、村は静寂を保っていた。村には、これといった産業はなく、農地も狭いから、多くの父親たちは、夏場に道路改修や山仕事などで働き、冬場は失業保険をもらって暮らしていた。この8月、金沢から白山経由の高速道路が開通する予定で、他に、富山直通のトンネル工事も計画されている。これらが軌道に乗れば、白川村も、観光で自立できる可能性が生まれる。しかし、現在のところ、若者たちが村に留ったとしても、適当な仕事を見出しがたい。加えて、村に高校がなく、進学するには、高山へ下宿せざるを得ない。子どもたちは、遅かれ早かれ、村を出ていかねばならない。それには、教育を受けさせるのが近道である。昨年の中学校卒業生の内、進学者は95%に達している。

当然、村の人々は教育に熱心である。調査に訪れた日は、たまたま、学級参観と重なっていたが、高学年でも、出席率は良好であった。父母を対象に、学校の実施したアンケート調査があり、その中に「ある程度、宿題を出して欲しい」84.2%、「高校以上の進学期待」98.6%などの数値が残されていた。しかし、教育に意欲を燃やすのは、学校も同様であった。校長は、「どこへ出しても恥ずかしくない子どもを育てたい。僻地だからといって、学力面でのハンデを子どもに負わせたくない」と、教育方針を語っていた。給食の前、毎日10分間—11時55分から12時5分まで—を「自学の時間」とし、この時間に自習の構えをつけさせるという試みも、そうした方針のあらわれであろう。

僻地のことゆえ、教師の大半は単身赴任している。しかも、村の中に娯楽施設が皆無の上、宿舎へ戻っても、帰りを待つ人がいるわけでもないから、教師たちは、夜遅くまで、学校にとどまっている。同僚と雑談しながら、ドリルを作ったり、ノートに朱を入れたりする。子どもたちが、「テスト勉強」の時に使っていた漢字の練習ドリルも、担任教師の夜なべ仕事の成果らしい。

S小の子どもたちを手がかりとして、学習塾の問題をまとめておこう。

1 塾通いが、子どもたちから、遊びを奪うという論議が多い。しかし、塾通い0%のS小でも、仲間との外遊びは認められなかった。これと同じ傾向が、先に一端を紹介した南島町のK小でも認められたことを考えると、塾通いの増加と遊びの喪失との間に、関連は存在するにせよ、両者を短絡的に結びつけるのは誤りであろう。

2 S小は学力の向上を重視しており、小テストをくり返し実施しているし、宿題を出すのを原則としている。したがって、村の中の唯一の教育機関として、学校は機能している。こうした学校の態度が、現在のところ、親たちの支持を集めている。

## 進学塾とその機能

3 S小の子どもで、塾通いをしているものはいない。しかし、それは、学習塾がないから、通えないのあって、身近に塾が作られれば、通塾の可能性は強い。事実、隣家の大学生が帰省した時、いつも勉強をみてもらうと答えた子がいたし、家庭教師代わりをうたい文句とするG社の「マイ・ティチャー」の利用者は3名を数えた。さらに、中学進学を控えて、O社の「中1時代」の定期購読者となった者が多いなどの事実が目につく。

今まで、大都市のM小、山村のS小という対照的な事例を紹介してきた。一見したところ、前者の通塾率が64%，後者は0%であるから、全く異質の事例のように考えられる。しかし、S小の親たちも、子どもに強い教育期待を抱いているから、村の中に学習塾が進出し、学校の方針が変わってくるなら、S小の子ども、通塾の渦に巻き込まれるのは、たしかであろう。つまり、M小とS小との間に、質的な開きが存在するのではなく、両者は、共通の土壤に立脚した程度の差を示しているにすぎない。

こうした結論を一般化させるなら、全国平均20%という小学生の通塾率は、昭和51年10月時点での数値なのであって、通塾児の背後に、それをはるかに上回る通塾予備層が存在している。したがって、教育状況の変化によって、通塾率は、さらに高まる可能性が強い。

放課後の子どもが、第2の学校へ通う。そうした病理的な教育状況を産み出した背景をマクロにとらえるなら、学歴の効用、大学入試制度、高校の選抜法など、社会と教育とでも呼びうるような巨大なテーマに広がってくる。しかし、こうした考察は、小稿で扱いうる範囲をはるかに超えた問題であるので、もう一度、学校レベルに、視点を戻そう。

面接調査をくり返す内に、同じような教育状況の地域でも、学校、学年、学級によって、通塾率に大きな開きが存在するのが明らかになってきた。学校—ミクロに言えば、学年や学級—の態度は、通塾率を規定する主要因の一つらしい。そこで、学校の体質に注目しながら、もう2、3の事例を紹介してみたい。

### 3. 学校の態度と通塾率

(1) 日本のサマー・ヒル 大阪府周辺のA市<sup>(8)</sup>B小学校6年X組、児童数36名。内、通塾児21名。通塾率58%。調査対象日、昭和51年6月16日。

B小は、調査に参加したわれわれに、強烈な印象を残した学校であった。大学院生の1人が、ニールの学校—A. S. Niel—にもじって、「日本のサマー・ヒル」と名づけた通り、異色の教育を行っていた。たまたま、この日は午後から面接をするスケジュールで、昼休みに学校へついた。教室へ入ると、教室の片隅に、うず高くマンガ雑誌がつまれてあり、なん人かの女の子が、トランプをやっていた。スピードという遊びらしい。他の子は花札に興じていた。チャイムがなると、子どもたちは遊び道具をしまい始めた。

面接後の担任との話し合いで、当然、このシーンが問題になった。他人に迷惑をかけず、授業が始まった時、勉強の準備ができていれば、どんな遊びをしても良いというのが、このクラスのルールだという。「賭けごとは禁止」と言わされて育った筆者は、遊びの解禁だけでも驚かされたが、それは序の口にすぎなかった。B小では、子どもの達成度を知る目的以外は、原則として、テストを実施しないし、教師がテストの結果をメモすることもない。子どもを選抜する結果になるから、通知票の廃止にふみきった。落ちこぼれのない教育を完全に目指すので、学習進度は大幅に遅れている。学年主任格として6年生をリードしている担任の教師は、自信にみちた表情で、こうした内容を話してくれた。「親たちが、どんな態度を示すか」の問いに、現在、親とは対立関係にあり、この2~3年、授業参観などのPTA行事は、いっさい中止しているという回答が返ってきた。

B小は、大阪府下A市の団地内に建てられている。昭和30年代に入居したやや年輩のホワイト・カラー層。ここで10年の間に移住してきた賃貸と分譲の団地族。それに、周辺の高級住宅地居住者とがって、学校運営のむつかしい学校であったという。さまざまなトラブルを経て、現在では、「ひとりの落ちこぼれを作らず、伸び伸びと勉強のできる学校作り」に徹することになった。その結果、上述のように、親たちと絶縁関係にある。

こうした学校の子どもたちは、どんな生活を送っているのだろうか。子どもたちの生活は、大別して、四つのタイプに分かれる。まず、第1は、けいこごとを含めて、何もしない子どもたち。36名の内、7名。この日、彼らは、勉強10分、テレビ視聴3時間10分という生活を送っていた。次は、スポーツ・クラブに熱中する子。これが、8名であった。団地の中に、少年野球のリトル・リーグに加盟しているチームがあり、5名の子が参加していた。小学2年から中学生まで、技能に応じて、初心者クラスからトップ・クラスまで、五つのチームが編成されている。火、水、木は、6時から1時間の早朝練習、他に、土曜は2時から6時、日曜は9時から6時が練習時間で、全員参加を原則とする。

第3は、K式で知られる数学塾などへ通っている子どもたち。これは11名。この内、2名は神戸の私立中学進学を目指して、地元の塾と、大阪の中心部で開かれるマンモス・テスト塾とに通っていた。第4は、英語の塾へ通う10名の子。これには、外人を招いて、小人数で教えてもらうデラックス・タイプから、30分ほど電車に乗って週に4回、英語スクールへ通う者まで、バラエティが見られた。中学へ入ったら、英語が必要だ。先回りをして、英語の力をつけさせるのが、親たちの判断であろう。

B小の場合、放課後の生活が個性的で、平均値は意味を持ちにくい。母親がつきそって、毎日2時間の勉強をしている子。朝と夕方、ラジオの英語放送を3年間聞き続けている子。週に7回、つまり、毎日、学習塾か、ピアノ教室かへ通っている子。親たちは、それぞれの仕方で、子どもに望みを托していた。

## 進学塾とその機能

B小の事例を一言で要約するなら、学校と家庭との断絶につきる。「ひとりの落ちこぼれを作らず、すべての子を等しく扱う」をスローガンに掲げて、学校が理想主義的な教育実践に踏み切った。どの子にも、少なくとも最低限の学力を保証する社会福祉型の学校経営である。この場合、学校の保証する学力が、一定の水準に達していれば、問題は少ない。しかし、B校の保証が、標準より下回っていたために、親たちは、学校への依存をあきらめ、学習塾や家庭学習を通じて、わが子の学力を伸ばす自衛手段を講じ始めている。

(2) 「1時間半勉強」を課する学校 京都府亀岡市C小5年X組、児童数35名。内、通塾児6名。通塾率17%。調査対象日、昭和51年3月6日。

亀岡は、京都から山陰本線に乗って1時間、城下町の名残りをとどめる町だ。また、大本教受難の地としても知られる。

学校を訪れた日、校内のポート・ボール大会が開かれていた。なじみ深い赤と白の他に、黄、緑、紫のはち巻きをした子どもたちがいた。その上、どの子も選手らしく、校庭は活気にあふれていた。校庭に入っただけで、沈滞ぎみの学校と、一味違う教育を行っているという印象を受けた。

面接後、担任に話を聞くと、5色のはち巻きは体育の授業でも、日常的に使っているという。地域性を加味して、クラスを5班に分け、子ども組的な意味を持たせているらしい。

こうした体育の他に、C校は、学習面でも種々の工夫をこらしていた。特に、注目を引いたのは、「1時間半勉強」であった。2学期末、学校全体で、子どもたちの家庭での生活ぶりを調査したところ、3時間を越えるテレビ視聴と読書量ゼロの姿が浮かんできた。5年生の担任が話し合った結果、子どもたちの生活を正す意味で、「1時間半勉強」を課することにした。奇数日用と偶数日用の2冊のノートを用意させ、奇数日は、偶数日用のノートを教室に置き、子どもたちは奇数日用で勉強する。学習に遅れがちの子には、担任がノートに問題を書き、苦手の課目の征服に努める。学力の平均程度の子に対しては、市販のドリルを配ることもある。そして、成績に心配のない子は、1時間半を読書と感想文のために使うように指示してある。

「1時間半勉強」を始めてから、2か月余りしか経過していないが、子どもたちの学力はめっきり伸び、読書量も増加したと、担任は評価していた。

ここで、放課後の子どもたちの生活を紹介しておこう。翌日、担任がノートを閲覧するから、ほとんどの子が、それぞれに1時間半を勉強の時間にさいていた。また、先ほどの子ども組が効を奏したのか、この日、10人の男子と5人の女子が、帰宅後、校庭へ戻って、ドッヂ・ボールやポート・ボールに興じていた。なお、塾通いをする子は6名で、この内、女の子の仲良し3人組が、水曜の4時から5時まで、英語塾へ通い、他は、K式の算数塾へ2名、補習塾1名の状況であった。その他、昨年、塾通いしていたが、今年に入ってからやめた子は、4名を数えた。読書力の増加を主目的

とした「1時間半勉強」は、塾通いの減少という副産物をもたらしたらしい。今まで、筆者は、40校近い学校を訪ねてきた。しかし、塾通いする子が減ったのは、C校のみであった。

C校は、学校が積極的な手を打って、塾通いに歯止めをかけた事例だと要約できよう。たしかに、「1時間半勉強」は、現在の学校で見受けられなくなった個別指導の原則に立脚している。平均の水準を上げながら、落ちこぼれがちな子に個別の指導を行い一時には補習教育をすることもある一、進みがちな子は幅を広げるという学力に対応した指導を目指している。特に、読書内容の選択は、本人に委ね、自主性を育てようとしている。学校のこうした態度が、親たちの間に「勉強のことは学校にまかせよう」という気運を生みだしたのであろう。

しかし、この方法にも、いくつかの問題が残されている。まず、担任は、子どもたちが毎日提出するノートに朱を入れ、場合によっては、練習問題を個別に作らねばならない。こうした作業に、1人当て2分としても、1時間半近く一実際は、2時間弱一をさく計算になる。授業や会議に追われる教師の生活の中から、この時間をうみ出すのは至難に近い。事実、C校の担任たちは、夜8時近くまで在校することが多いらしい。また、同校でも、過労になるとの異論が出て、教師間の足並みが揃わず、4年と6年では、「1時間半勉強」の実施に踏み切れないでいる。つまり、「1時間半勉強」は、教員にも「1時間半超過勤務」を強いいるから、現在の学校全般に、この方式の採用を望むのは妥当ではあるまい。

さらに、C校の場合、たしかに学習塾へ通う子は減少一または停滞一している。しかし、けいこ塾へ行く子は25名—71%，学習塾と重複する子がいる一に達する。そろばん、習字、ピアノ……である。小学3～4年生までがけいこごと、5年から学習塾へ通うのが、子どもたちの通常のパターンであろう。教師たちの努力の結果、C校の子の学習塾通いは減った。しかし、広義の塾通いは漸増しつつある。そろばんは算数、ピアノは音楽、習字は国語のように、けいこ塾も、限られた範囲にせよ、教科の技能教育的な意味を持つ。主要4教科かどうかの違いは存在するにせよ、けいこ塾が、補習教育機関一あるいは、学校の機能を補完する機関一的な機能を果たしているのは、否定できない。C校の子の7割一学習塾を含めると8割一が、そうした機関へ通う状況は、学校が「1時間半勉強」を中止すれば、ただちにけいこ塾から学習塾へ、子どもたちの行き先が変わる下地を形づくっている(9)。

枚数の制約を考えて、ここで、事例の紹介は省略したいが(10)，上記の4校を手がかりとして、もう少し、一般化した形で、学習塾の問題を考察しておきたい。

#### 4. まとめにかえて一岐路に立つ学校

B校とC校との対比が示すように、通塾率の高低は、各学校一こまかく見れば、学年、そして、学級一の態度に規定される側面が大きい。冒頭で紹介したM校でも、学

## 進学塾とその機能

校が、なんらかの補習指導—「1時間半勉強」もその一例だが—に乗りだせば、通塾率は半減されよう。現代の学校—特に小学校—は、共通教育の場としての色彩を強めている。すべての子に、最低限の学力を保証する社会福祉型の学校である。当然、底辺の水準を上げることに、重点がおかれる。旧制中学入学者、つまり、エリートの輩出率を競った戦前の学校を想起すれば、B校の教師たちが目指したような学校改革も、一つの正しい方向であろう。しかし、その場合、子どもの可能性を最大限に伸ばしたいと考える親たちが、それぞれの考えに基づいて、個別指導の場—けいこ塾も含めて—を、学校以外に求めるのは止むを得まい。共通教育=学校、個別教育=補習教育という教育機関が二元化された構図である。

こうした傾向を強めた場合、補習教育機関—学習塾やけいこ塾の他、スポーツ・クラブなどのすべてを含めて—も、子どもの教育の一端を担うことになるから、これらの施設も教育機関として位置づかねばならない。地域レベルにせよ、両者が共通の地盤をふまえて、子どもの教育を語り合う場が必要となろう。それと同時に、補習教育機関も、公教育一法的な意味でなく一の視点から、設備や教員、教育方法などの充実に努めねばならない。

問題は、教師および親たちが、学校の機能をどの程度に限るかであろう。抽象化されたレベルでとらえれば、「すべての子を等しく」は望ましい理想像である。しかし、現実の授業場面を想起すると、「等しく」を強調するにつれて、足踏みをさせられる子が増加してくる。現代の学校に個別化の原理が欠けている。つまり、学校段階のどこまでが共通教育の場で、どこから個別指導を行うのかという青写真が描かれていません。しかし、職業などを中心に、社会の細分化が進む現状を直視すれば、そうであるから、なお一層、共通教育の必要性を感じると同時に、教育の個別化は不可避と考えられる。従来、個別化は選抜または差別に連なるという主張が為されてきた。近代日本の学校の歩みを思いおこすと、そうした指摘をする背景は理解できる。しかし、学校が、現実の社会—特に親たちの心情—から超越した理想主義へ傾斜しすぎることは、塾通いに象徴されるような陰の教育機関を生みだし、学校の社会的な機能を低下させる結果を招く。したがって、学校が子どもを教育する主要な機関としての地位を保持するためには、一定の学校段階から、子どもの個性に対応するプログラムを用意せねばならない。図式化していうなら、現代の学校は、前述のB校式かC校式かの岐路に立たされている。そして、学校の機能についてのコンセンサスがどのように成立するかによって、地域ごとに、学校の果たす役割が違って来よう。学校も、多様化の時代を迎えようとしている。

小稿では、学校のレベルに分析の対象を限定したので、塾通いを成立させた土壤ともいべき教育課程や入試制度などの問題を捨象してきた。こうしたマクロの分析は、必要性を痛感しつつも割愛せざるを得なかった。また、個々の教師の指導力も、塾通いに影響するところが多い。授業技術の卓越した教師は、授業時間内でも、落ち

こぼれを防ぎ、子どもたちの個性にも対応できよう。したがって、教師の指導技術を高めることが、塾通いの衰退に役立つと考えられる。しかし、ここでは、問題の所在を指摘することにとどめる。

### 〔注〕

- (1) 昭和49年から51年にかけての主な調査を示すと、以下のようになる。
  - (a) 「家庭学習の実態に関する調査」（神戸市立教育研究所）昭和49年3月
  - (b) 「小・中学校における児童・生徒の通塾調査」（愛知県教育委員会）昭和50年2月
  - (c) 「塾や家庭教師に関する実態調査」（滋賀県教育委員会）昭和50年2月
  - (d) 「学校以外における学習等（塾、家庭教師）実態調査」（埼玉県教育委員会）昭和50年8月
  - (e) 「教育問題に関する実態調査」（東京都都民室）昭和50年12月
  - (f) 「余暇生活の実態と意識調査」（名古屋市教育委員会）昭和51年3月
  - (g) 「塾に関する調査」（静岡県教育委員会）昭和51年3月
  - (h) 「児童・生徒の学校外学習活動に関する実態調査」（東京都教育庁）昭和51年6月
  - (i) 「学校外学習活動の実態調査」（香川県教育委員会）昭和51年11月

その他に、福岡県中学校長会、茨城県市町村教育委員会連合会などの調査もある。
- (2) 総理府広報室「教育への関心調査」「世論調査」昭和52年1月、2~32ページ。
- (3) NHK放送世論調査所「家庭と教育」「文研月報」昭和52年2月、24~35ページ、3月、27~39ページ
- (4) 東海銀行「子どもの教育費調査」昭和52年1月
- (5) 速報をまとめて出版したものは、文部省大臣官房調査統計課『全国の学習塾通いの実態』ぎょうせい 昭和52年3月
- (6) 壇融「世論調査からみた愛媛の中学校教育」「文研月報」昭和52年9月~10月
- (7) 深谷昌志、和子『遊びと勉強』中公新書、昭和51年 109~115ページ
- (8) S小については、深谷和子「おしよせる『平均化』の波の中で」「少年補導」昭和52年5月に、概要を紹介した。
- (9) C小については、深谷昌志「岐路に立つ学校」「学級経営」昭和51年11月号に、概要を紹介した。
- (10) その他、本稿でふれえなかった学校の例としては、深谷昌志「子ども、文明、そして、教育」「学校経営」昭和52年2月、「現代っ子にとっての勤労体験学習」「教職研修」昭和52年5月、「過保護社会の行きつくところ」「月刊エコノミスト」昭和52年2月など。